

## 日本人幼児における神様の超自然的な能力についての概念： 神様は何でもお見通しか？

常葉学園大学教育学部<sup>1)</sup> 中道圭人

### Japanese young children's concepts on the supernatural ability of God: Could God know everything?

Faculty of Education, Tokoha Gakuen University NAKAMICHI, Keito

#### 要約

本研究は、日本人幼児におけるヒトと神様の区別の認識を検討した。公立保育園に通う幼児 47 名（3-6 歳）が実験に参加した。実験では、ヒト・サル・優れた知覚を持つ動物・神様が登場する誤信念課題の変形版が実施された。その結果、年少児はそれぞれのエージェントの反応を区別しなかったが、年長児は神様に対してサルやヒトとは異なる反応をした。具体的には、年長児はヒトやサルに誤信念を帰属したが、神様に誤信念を帰属しなかった。本研究は、宗教的基盤の異なる日本においてでさえ、幼児が欧米の先行研究と類似した神様概念を持つことを提案している。

**【キー・ワード】** 就学前児, 認知発達, 神様概念, 誤信念

#### Abstract

This study examined young children's understanding of difference between human and God in Japan. Forty-seven preschoolers (3- to 6-year old) participated in this study. Participants were asked about the mental states of human, monkey, animals with special senses, and God in false-belief tests. The results showed that 3- to 4-year olds did not distinguish the mental states of each agent, but 5- to 6-year olds distinguished God from human or monkey: specifically, 5- to 6-year olds attributed the false-belief to human or monkey but not to God. The data suggested that Japanese young children had the God-concept similar to previous study, even in Japan with a different religious base from Europe and America.

**【Key words】** preschooler, cognitive development, god-concept, false-belief

---

<sup>1)</sup> 現所属：静岡大学教育学部

## 問題・目的

多くの大人は、実際に神様を見たことも出会ったこともない。それにも関わらず、我々は神様についての様々な認識を持つ。たとえば Gray, Gray, & Wegner (2007) は、成人に 13 種類のエージェント (e.g. 男, 乳児, 死者, ロボット, 神様, 等) の心的特性 (e.g. 痛みを感じるか) について評価させた。その結果, 成人は **experience** (e.g. 恐れ, 痛み, 喜び, 等) と **agency** (e.g. 自己制御, 道徳性, 記憶, 等) という 2 つの基準を用いてエージェントを評価し, 神様は **agency** についてはヒトと類似している (e.g. ヒトと同じく自己制御などの能力を持つ) が, **experience** についてはヒトとは類似していない (e.g. ロボットや死者と同じく, 感情を持たない) と認識していた。このように, 大人は観察不可能な神様というエージェントについての, ヒトとは区別された概念を持っている。

ここ 10-20 年の間に, 低年齢の子どもでもさえ, 神様に関する概念を持つことが示されてきた (e.g. Barrett, Richert, & Driesenga, 2001; Lane, Wellman, & Evans, 2010; Makris & Pnevmatikos, 2007; Richert & Barrett, 2005)。たとえば, Barrett et al. (2001, Ex3) は, 米国の 3-8 歳児に見かけ-本当課題の変形版 (以下, 暗闇課題) を実施した。暗闇課題では, 参加児に覗き穴のある箱を提示し, 覗き穴から箱の中身は暗くて見えないことを確認させた後, 実験者が覗き穴からライトで照らしながら, 箱の中身 (i.e. ブロック) を参加児に見せた。そして, 参加児以外のヒト・サル・神様・優れた知覚を持つ動物 (猫) がライトで照らさずに穴を覗いたら何が見えるかを尋ねた。その結果, 神様や猫に関してはいずれの年齢でも “ブロックが見える” と反応することが多かった。一方, ヒトやサルに関して, 3 歳児は “ブロックが見える” という反応が多かったが, 年齢発達に伴い “何も見えない” という反応が増加した。つまり, 年長の子ども達は “ヒトは暗闇でモノを見ることができない”, “ヒトは見ていないものは知らない” といったことを理解していたにも関わらず, このヒトの限界を神様には帰属しなかった。

また, Lane et al. (2010) は米国の 3-6 歳児に予期せぬ中身課題の変形版 (参加児にクレヨン箱にマールが入っているのを見せた後, 他のエージェントが初めて箱を見たら, 何が入っているのかを尋ねる) と Barrett et al. (2001, Ex3) と類似の暗闇課題を行った。分析では, まず課題別に参加児を Young 群 (予期せぬ中身=40-52.4 ヶ月: 暗闇課題=40-49.4 ヶ月), Old 群 (予期せぬ中身=59 ヶ月以上: 暗闇課題=54.6 ヶ月以上), そして, その真ん中の年齢範囲の Middle 群 (予期せぬ中身=52.5-58.9 ヶ月: 暗闇課題=49.5-54.5 ヶ月) に分類した。各群の課題遂行を比較すると, いずれの課題でも Young 群から Middle 群にかけて通常のヒトと同様に神様にも “誤信念” (e.g. クレヨン) を帰属することが多くなった。そして, Middle 群から Old 群にかけて通常のヒトには “誤信念” を, 神様には “正しい信念” (e.g. マール) を帰属することが多くなった。

これらの研究は, 子ども達が少なくとも 5 歳頃までにはヒトと神様を区別し, 神様がヒトを超えた超自然的な能力を持つと認識していることを示唆している。しかし, 従来の研究は欧米の文化圏で実施されており, それ以外の文化圏での幼児の神様概念はほとんど検討されていない (数少ない研究として, マヤ族を対象とした Knight, Sousa, Barrett, & Atran, 2004 を参照)。文化圏の異なる日本においても, 幼児は類似の概念を持つ, あるいは類似の発達をたどるのだろうか。

“神様”という概念は多くの文化・宗教で共通して見られるが、その特徴は文化・宗教で相違がある。たとえば、欧米の文化圏に根付いているキリスト教では神様は唯一の存在で (i.e. 一神論), ヒトを越えた全知性を持つとしている。一方で、日本に根付いている仏教・神道では、神様は複数おり (i.e. 多神論), 神様はヒトを超えた能力を持つが、多くの場合、個々の神様の能力は領域特殊 (e.g. ある神様は健康を、他の神様は学業を司る) である (e.g. 西脇, 2011)。また、日常生活の中での宗教のあり方も、日本は欧米の文化圏とは異なっている。たとえば、日本は欧米諸国より特定の宗教を信仰している人の割合が低く (日本=3割以下, 欧米諸国=6-7割以上: 林, 2010), 子ども達が神様に関して明示的に学ぶ機会 (e.g. 聖書・経典を読む, 礼拝で教義を聞く) は少ない。これらを踏まえると、日本人幼児の神様概念の発達には欧米文化圏とは異なる可能性が高い。

しかし、日本においても何らかの宗教的行事 (e.g. 先祖の墓参り, 新年の参拝) に参加する人や、観察不可能だが宗教上は存在すると考えられているもの (e.g. 神様, 祖先の霊的な力, 死後の世界) を1つでも肯定する人は8-9割にのぼり (e.g. 西, 2009), ある種の宗教的基盤が日常生活の中で暗黙に存在している。また中道 (2011) は、日本の3-6歳児を対象に参加児自身・母親・神様が空想上の存在 (e.g. 妖精, シャベラクマ) を観察できるかを尋ね、全体的に幼児がヒトと神様を区別した反応をなすこと (i.e. 自分自身や母親は空想上の存在を観察できないが, 神様なら観察できる) を示している。これらを踏まえると、日本の幼児でも欧米圏の幼児と類似した神様概念を持ち、類似の発達をたどる可能性もある。

日本人幼児の神様概念の発達を検討した実験的研究は中道 (2011) 以外になく、いずれの可能性が妥当であるかの証拠は十分ではない。そこで本研究では Barrett et al. (2001) や Richert & Barrett (2005) を参考に、日本人幼児の神様概念の発達を実験的に検討する。これは、未だ不明確な日本人幼児の神様概念の一部を明らかにすることとなる。また、欧米諸国とは異なる文化圏での研究結果は、幼児の神様概念の発達に関する従来の仮説 (準備性仮説と擬人化仮説: e.g. Barrett & Richert, 2003) の妥当性を検証するためのさらなる材料を提供することになる。さらに、日本における観察不可能な存在についての概念発達を今後検討していく上でも、1つの知見を提供することになる。

## 方 法

### 参加児

年少児 24 名 (女 11 :  $M=47.7$  ヶ月, 範囲=43-54 ヶ月), 年中児 24 名 (女 11 :  $M=58.8$  ヶ月, 範囲=54-64 ヶ月), 年長児 24 名 (女 11 :  $M=71.3$  ヶ月, 範囲=66-76 ヶ月) が参加した。すべての参加児は、静岡県内の特定の宗教を信仰していない公立保育所に通っていた。

### 課題・手続き

本実験の前に、予備調査を行った。予備調査は保育所の静かな部屋で個別に実施され、課題に登場する動物の名前 (サル・犬・ウサギ・猫) および“神様”という単語を知っているかを参加児に尋ねた。その結果、各動物の名前は全ての参加児が「知っている」と回答したが、神様に関しては 25 名が「知

らない」と回答した (34.7% : 年少児=11 名, 年中児=10 名, 年長児=4 名)。本実験ではこの 25 名を除いた 47 名を対象とした : 年少児 13 名 (女 7 :  $M=47.4$  ヶ月, 範囲=43-53 ヶ月), 年中児 14 名 (女 7 :  $M=58.4$  ヶ月, 範囲=54-64 ヶ月), 年長児 20 名 (女 9 :  $M=70.9$  ヶ月, 範囲=66-76 ヶ月)。

本実験は予備調査と同様に, 保育所の静かな部屋で参加児別に実施された。最初に, ラポールを形成した後, 課題に登場する主人公の子ども, サル, 優れた知覚を持つ動物 (犬・ウサギ・猫), 神様を紹介した。その後, 本課題 3 問 (ケーキ課題・昆虫課題・暗闇課題) を行った。以下に各課題の具体的な内容を示す。

**ケーキ課題 (嗅覚能力と関連)** 最初に, 参加児に甘い匂いのするスポンジのケーキを提示し, ケーキから甘い匂いがすることを確認させた。その後, 主人公の子ども・サル・犬 (優れた知覚を持つ動物)・神様が登場する誤信念課題と類似した物語 (太郎君・サル・犬が部屋にいる⇒太郎君が皆の前で甘い匂いのするケーキを赤い箱にしまい, 皆で部屋を出る⇒母親がケーキを青い箱に移す) を, 模型を用いながら提示した。続けて, 記憶質問 (e.g. 最初, ケーキをどこにしまったか), 事実質問 (e.g. 今, ケーキはどこにあるか) を尋ね, 最後に, 主人公・サル・犬・神様 (以下, エージェント) が部屋に戻ってきた時に, 移動された事物がどちらの箱に入っていると思うか (位置把握質問) を尋ねた。

**昆虫課題 (聴覚能力と関連)** 移動される事物として小さな電動の虫の玩具 (タカラトミーアーツ, HEX BUG nano ブラック) を使用したこと, 事前に参加児に電動の虫を箱に入れると小さな音がすることを確認させたこと, そして優れた知覚を持つ動物としてウサギが登場したことを除いて, ケーキ課題と同様の手順で実施した。

**暗闇課題 (視覚能力と関連)** 最初に, 主人公の部屋の模型 (側面に小さな隙間の開いた大きな箱) を参加児に提示した。そして, ペンライトで照らさない場合は部屋の中が見えないことを参加児に確認させた。その後, ペンライトを点け, 参加児に隙間から部屋の中をのぞかせ, 主人公がボールをある箱に入れ, ペンライトを消して部屋を去る場面を提示した。続けて, 母親が暗い部屋に入り, ボールを別の透明の箱<sup>2)</sup>に移動させたことを伝えた。そして, ペンライトを点け, 隙間からボールが透明な箱にあることを確認させた。その後, ケーキ課題・昆虫課題と同様に, 記憶質問, 事実質問, そして位置把握質問 (e.g. 主人公・サル・猫・神様がペンライトを点けずに覗き穴から見たら, ボールがどこにあると思うか) を尋ねた。

これらの課題の提示順や事物の位置はカウンターバランスされた。また, それぞれの課題で各エージェント (主人公の子ども・サル・優れた知覚を持つ動物・神様) の質問順はランダムにされた。

## 得点化

記憶質問・事実質問に正答し, 位置把握質問で最終的な事物の場所を回答した場合に 1 点を, それ以外の回答に 0 点を与え, エージェント別に合計点を算出した (各 3 点満点 : 以下, 位置把握得点)。

<sup>2)</sup> 暗闇課題では, 事物の移動の際にライトを消すため, 参加児は事物の移動された場所を目視できない。これは, この課題における現在の事物の位置に関する参加児の認識が他の 2 つの課題より弱まり, 課題遂行に影響を及ぼす可能性を生じさせる。そこで本研究では, 参加児の現在の事物の位置に関する認識を強めるため, 本研究では透明な箱を用いた。

## 結 果

### 年齢による各エージェントの位置把握得点の違い

年齢・エージェント別の位置把握得点を表1に示す。年齢・エージェントによる得点の違いを検討するため、年齢(3)×エージェント(4)の分散分析を行った(被験者間要因=年齢:被験者内要因=エージェント)。その結果、エージェントの主効果( $F(3, 132)=8.28, p<.01, \eta_p^2=.16$ )が有意で、主人公の得点は優れた知覚を持つ動物・神様の得点より有意に低く( $ps<.01$ )、サルの得点より低い傾向があった( $p<.10$ )。年齢の主効果( $F(2, 44)=1.63, ns$ )は有意でなかった。また、年齢×エージェントの交互作用( $F(6, 132)=3.55, p<.01, \eta_p^2=.16$ )が有意であった。

交互作用(図1)について検討するために、単純主効果の検定を行った。まず、エージェント別に各年齢での得点を比較したところ、主人公( $F(2, 44)=8.34, p<.01, \eta_p^2=.28$ )、サル( $F(2, 44)=3.67, p<.05, \eta_p^2=.28$ )の単純主効果が有意で、いずれにおいても年少児より年長児で得点が低かった( $ps<.05$ )。優れた知覚を持つ動物( $F(2, 44)=.02, ns$ )および神様( $F(2, 44)=1.43, ns$ )の単純主効果は有意でなかった。続いて、年齢別に各エージェントの得点を比較した。その結果、年長児( $F(3, 42)=19.81, p<.01, \eta_p^2=.59$ )の単純主効果が有意で、優れた知覚を持つ動物や神様より主人公やサルの得点が低かった( $ps<.05$ )。年中児( $F(3, 42)=2.56, p<.10, \eta_p^2=.16$ )の単純主効果は有意傾向であったが、多重比較では各エージェントの得点に有意な差はなかった。年少児( $F(3, 42)=.09, ns$ )の単純主効果は有意でなかった。

表1 年齢・エージェント別の位置把握得点

	主人公	サル	優れた知覚 を持つ動物	神様
年少児 ( $n = 13$ )	1.54 (1.27)	1.69 (1.18)	1.62 (1.39)	1.54 (0.97)
年中児 ( $n = 14$ )	0.79 (1.31)	1.36 (1.28)	1.57 (1.34)	1.43 (0.94)
年長児 ( $n = 20$ )	0.10 (0.31)	0.65 (0.99)	1.65 (1.09)	2.00 (1.17)
合計 ( $N = 47$ )	0.70 (1.14)	1.15 (1.20)	1.62 (1.23)	1.70 (1.06)

括弧内は標準偏差

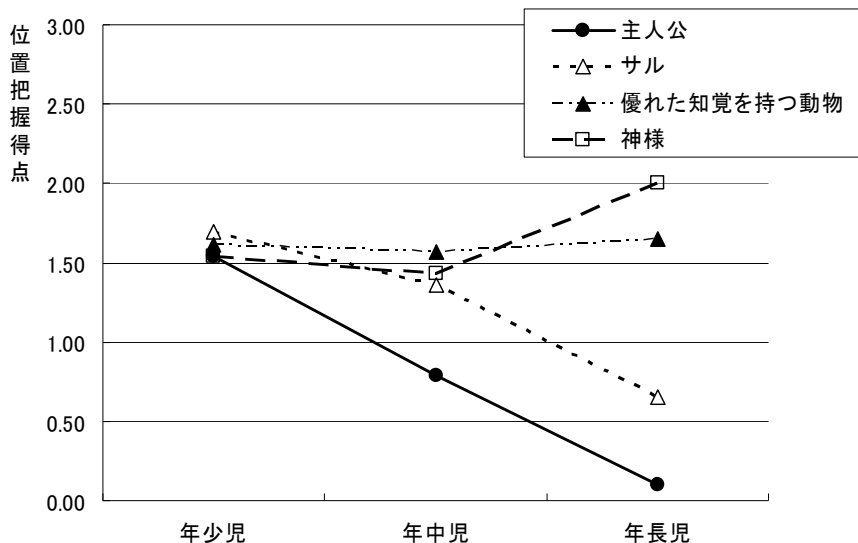


図 1 年齢×エージェントの交互作用

次に、各エージェントの位置把握得点がチャンスレベル (=1.5) と異なるかを検討するため、1 サンプルの  $t$  検定を行った。その結果、年少児ではいずれのエージェントの得点もチャンスレベルと違いはなかった：主人公、 $t(12)=.11, ns$ ；サル、 $t(12)=.59, ns$ ；優れた知覚を持つ動物、 $t(12)=.30, ns$ ；神様、 $t(12)=.14, ns$ 。年中児では、主人公の得点がチャンスレベルより低い傾向があった ( $t(13)=2.04, p<.10, r=.49$ ) が、サル ( $t(13)=.42, ns$ )、優れた知覚を持つ動物 ( $t(13)=.20, ns$ )、神様 ( $t(13)=.29, ns$ ) ではチャンスレベルと違いはなかった。年長児では、主人公 ( $t(19)=20.34, p<.01, r=.98$ ) とサル ( $t(19)=3.85, p<.01, r=.66$ ) の得点はチャンスレベルより低く、神様 ( $t(19)=1.92, p<.10, r=.40$ ) の得点はチャンスレベルより高い傾向があった：優れた知覚を持つ動物、 $t(19)=.62, ns$ 。

#### 年齢別の各エージェントの位置把握得点の関連

各エージェントの位置把握得点の関連を検討するため、年齢別に相関分析を行った (表 2)。その結果、年少児では主人公と神様の得点に正の相関、年中児では主人公とサルの得点、サルと優れた知覚を持つ動物の得点に正の相関が見られた。その他の有意な相関は見られなかった。

表2 年齢別の各位置把握得点の関連

	主人公	サル	優れた知覚を持つ動物	神様
<b>年少児</b>				
主人公	1.00			
サル	.34	1.00		
優れた知覚を持つ動物	.46	-.18	1.00	
神様	.76 **	.23	.29	1.00
<b>年中児</b>				
主人公	1.00			
サル	.74 **	1.00		
優れた知覚を持つ動物	.42	.59 *	1.00	
神様	.39	.31	.28	1.00
<b>年長児</b>				
主人公	1.00			
サル	-.05	1.00		
優れた知覚を持つ動物	-.05	.32	1.00	
神様	-.15	.14	.29	1.00

\*  $p < .05$  \*\*  $p < .01$ 

## 考 察

本研究では、日本人幼児における神様概念の発達を検討した。まず予備調査に関して、「神様を知っている」と回答した参加児は72名中47名(65.3%)であった。従来の欧米圏の研究では、参加児のほとんどが神様を知っていた：たとえば、「神様を知っている」と回答した幼児は Richert & Barrett (2005) では42名中39名(92.9%), Makris & Pnevmatikos (2007) では127名中120名(94.5%)であった。前述(e.g. 林, 2010)のように、欧米諸国に比べて日本の幼児は神様について明示的に学ぶ機会も少ないため、神様という存在自体を知らないことが多かったのであろう。

続いて、本実験の結果に関して論じていく。まず年齢別に見ると、年少児ではいずれのエージェントに対しても曖昧な認識(チャンスレベルと同程度の遂行)を持ち、明確な区別をしていなかった。年中児はチャンスレベルを超えて“ヒトには事物の位置がわからない”という認識を持ち始める一方で、その他のエージェントに対してはまだ曖昧な認識を持っていた。そして年長児では、そのヒトに関する認識がさらに強まる一方で、“サルは事物の位置がわからない”“神様は事物の位置がわかる”といった各エージェントを区別した認識を持つようになった。ヒトに対する反応の発達的变化は、誤信念などのヒトの心的状態が4歳頃に理解されるという従来の知見(e.g. Wellman, Cross, Watson, 2001)と一致するものであった。また、ヒトと神様を区別できる時期は、欧米圏の幼児の結果(e.g. Barrett et al., 2001; Lane et al., 2010; Makris & Pnevmatikos, 2007; Richert & Barrett, 2005)と比べるとやや遅いものの、全体的な発達の軌跡は類似しており、日本人幼児であっても5歳頃にはヒトと神様を区別し、神様がヒトを超えた超自然的な能力を持つと認識していることを示している。

では、日本の幼児達はこの神様概念をどのように形成したのであろうか。神様概念の発達の説明として、準備性仮説と擬人化仮説がある。準備性仮説では、子ども達は神様概念を形成する生得的な準

備性を持ち、発達早期からヒトと神様を区別し、ヒトの概念より先に神様概念を形成すると考える (e.g. Barrett & Richert, 2003; Barrett et al., 2001)。一方、擬人化仮説では、発達早期の子ども達はまずヒトの概念を形成し、神様を擬人的に類推することによって理解し、その後、ヒトとは異なる神様概念を形成すると考える (e.g. Lane et al., 2010; Makris & Pnevmatikos, 2007)。本研究の年少児や年中児が“神様は事物の位置がわかる”といった認識を持っていなかったこと、そして年中児がヒトの位置把握に関する正しい認識を持ち始めていたことから、ヒトの概念より先に神様概念が形成されてはいなかった。また年齢別の相関分析から、年少児はヒトと神様に対して類似した反応をなしていた。これらの本研究の結果は、準備性仮説より、擬人化仮説と一致するものと考えられる。

また、従来の研究とは異なる文化圏で実施した本研究の結果は、擬人化仮説によって説明される部分が多いと考えられる。日常生活の中で暗黙に存在する宗教的基盤があるとはいえ、特定の宗教を信仰する人が少ない日本では、子ども達が神様について明示的に学んだり、会話の中で触れる機会は欧米の文化圏より少ない。ある特性に関する生得的な準備性が存在する場合でも、それに適した環境がなければ、その準備性が発現する可能性は低い (e.g. Bjorklund & Pellegrini, 2002)。子ども達が神様概念の準備性を持っていたとしても、学ぶ機会が少ない日本ではその特性が発現しない、あるいは発現が大幅に遅れる可能性が高い。しかし、本研究の参加児は欧米諸国と同時期にヒトと神様を区別していた。また、仮にその準備性が環境を必要としないなら、早期から“神様なら位置がわかる”と認識するはずである。しかし、本研究の年少児や年中児は神様の超自然的な能力を必ずしも認識していなかった。

一方、擬人化仮説が想定するような、ヒトの概念をベースに類推する認知的プロセスは文化を超えて共通する可能性が高い。たとえば、ある生き物が持つ未知の特性を推測する際に、幼児はヒトに関する知識をベースとしてその未知の特性を理解する傾向があり、その傾向は文化にある程度普遍的である (Inagaki & Hatano, 2002)。そのため、宗教的基盤が異なる場合や神様について明示的に学ぶ機会が少ない場合でも、ヒトの概念さえ獲得すれば、子ども達はヒトの概念をベースとした類推という認知的プロセスによって神様を理解し始めることが可能となり、結果として文化を超えて類似の発達をたどる可能性が考えられる。これらを踏まえると、擬人化仮説のように、日本の幼児達は擬人化による類推で神様概念を形成していたのかもしれない。もちろん、本研究はこれらの仮説の妥当性を検証するための実験計画とは必ずしもなっていないため、この点に関するさらなる研究が必要である。

まとめると、本研究の結果は日本人幼児における神様概念の発達に関する新たな知見を提供するとともに、神様概念の形成を説明する擬人化仮説に対する部分的な支持を与えた。しかし、日本をはじめとするアジア圏においては幼児の神様概念に関する研究はほとんどなく、より一層の研究が必要である。1つの方向性としては、4-5歳にかけての神様に関する概念変化をもたらす要因を検討することである。日本人幼児がヒトの概念をベースに神様を理解していたとしても、なぜ4-5歳でヒトと神様を区別するようになるのかは、本研究からでは明らかでない。何がこの概念変化をもたらすのかを検討していく必要がある。また別の研究の方向性としては、神様以外の観察不可能なエージェント (e.g. 胎児, 死者) や存在 (e.g. 空気, 細菌) に関する幼児の概念を検討することである。日本においては、空想上の観察不可能なエージェント (e.g. サンタクロース) の実在・非実在などに関して検



討されてきたが (e.g. 富田, 2002), それ以外の観察不可能なエージェント・存在に関する研究はほとんど見られない。それらの観察不可能なエージェント・存在の理解は、後の科学的概念の萌芽ともいえるものであり、今後の研究が期待される。

## 引用文献

- Barrett, J. L., & Richert, R. A. (2003). Anthropomorphism or preparedness? Exploring children's God concepts. *Review of Religious Research*, **44**, 300-312.
- Barrett, J. L., Richert, R. A., & Driesenga, A. (2001). God's beliefs versus mother's: The development of non-human agent concepts. *Child Development*, **72**, 50-65.
- Bjorklund, D. F., & Pellegrini, A. D. (2002). *The origins of human nature: Evolutionary developmental psychology*. American Psychological Association.
- Gray, H. M., Gray, K., & Wegner, D. M. (2007). Dimensions of mind perception. *Science*, **315**, 619.
- 林 文 (2010). 現代日本人にとっての信仰の有無と宗教的な心-日本人の国民性調査と国際比較調査から-. *統計数理*, **58**, 39-59.
- Inagaki, K., & Hatano, G. (2002). *Young children's naïve thinking about the biological world*. Psychology Press.
- Knight, N., Sousa, P., Barrett, J. L., & Atran, S. (2004). Children's attributions of beliefs to humans and God: Cross-cultural evidence. *Cognitive Science*, **28**, 117-126.
- Lane, J. D., Wellman, H. M., & Evans, E. M. (2010). Children's understanding of ordinary and extraordinary minds. *Child Development*, **81**, 1475-1489.
- Makris, N., & Pnevmatikos, D. (2007). Children's understanding of human and super-natural mind. *Cognitive Development*, **22**, 365-375.
- 中道圭人 (2011). 幼児の神様に関する理解：神様は空想上の存在を見ることができるのか？ 常葉学園大学研究紀要(外国語学部), **27**, 229-245.
- 西久美子 (2009). “宗教的なもの”にひかれる日本人～ISSP 国際比較調査(宗教)から～. *放送研究と調査*, **59**, 66-81.
- 西脇 良 (2011). 日本人のカミ観念. 松島公望・河野由美・杉山幸子・西脇 良(編) 宗教心理学概論 (pp.81-82). ナカニシヤ出版
- Richert, R. A., & Barrett, J. L. (2005). Do you see what I see? Young children's assumptions about God's perceptual abilities. *The International Journal for the Psychology of Religion*, **15**, 283-295.
- 富田昌平 (2002). 実在か非実在か：空想の存在に対する幼児・児童の認識. *発達心理学研究*, **13**, 122-135.
- Wellman, H. M., Cross, D., & Watson, J. (2001). Meta-analysis of theory-of-mind development: The truth about false belief. *Child Development*, **72**, 655-684.

